

ガラテヤの 3 章 19 節をお開き下さい。19～20 節を最初に通して読ませて頂きたいと思います。『¹⁹では、律法とは何でしょうか。それは約束をお受けになった、この子孫が来られるときまで、違反を示すためにつけ加えられたもので、御使いたちを通して仲介者の手で定められたのです。²⁰ 仲介者は一方だけに属するものではありません。しかし約束を賜わる神は唯一者です。』ここで先週までの内容も思い出して頂きたいと思いますが、“この子孫”と 19 節にある言葉は単数形です。16 節のところに“この子孫”、ひとりの子孫は一体誰なのかということが明らかにされています。それはイエス・キリストであると、パウロは明言しています。アブラハム契約、それはアブラハムと神との直接契約でありました。そこには仲介者などおりません。そしてアブラハム契約には、その子孫、ひとりの子孫イエス・キリストも含まれているということです。その約束と呼ばれるものは、後に 430 年後にモーセを通して与えられる律法よりもはるかに優っているということ、今ずっとその流れを見ているわけです。もし私たちの歩みが、生き方が単純に神の言われたこと、若しくは成されたこと、つまり神様の約束に基づくもので、それを私たちが信じるだけで救われ、神のありとあらゆる約束の祝福に与ることが出来るとするならば、そもそも律法なんて必要ないじゃないですか。何のために律法がわざわざ後から 430 年後に与えられる必要があったのでしょうか。その律法の目的とは一体何なんですか、という疑問が自然に必然的に湧いてくるものであります。律法というものと約束というものの違いをこれまでずっと 3 章のテーマとして見ておりますけれども、信じるだけで救われるという信仰義認は、アブラハム契約の時にも既に確立されていたものでした。それでもう充分なはずですが、でもわざわざ神は仲介者まで立てて、430 年後にモーセを介してイスラエルの民に律法をお与えになりました。もうこのアブラハム契約というものがどんなに優れているかという話は言うまでもないことなんですけれども、それは律法が後からつけ加えられたところで無効になるものではない。それは永遠で、永遠に有効なもので、また保証されているもので、律法が現れたからといってその約束が覆^{くつがえ}されることがないという議論をパウロははずとして、その上で「では律法の目的とは何なのか。」と。律法は私たち人間の罪のゆえに、世の罪を取り除く神の小羊がこの世に現れるまで、その期間の中で与えられ、その期間の中で働くものだとパウロは述べているわけです。律法というものはシナイ山においてまずは御使いたちを通してモーセに直接与えられました。そしてモーセが今度は仲介者となって山の麓^{もと}にいたイスラエルの民にそれを与えたわけです。律法は直接与えられたものではなくて、仲介者を通して間接的に与えられたもの。一方約束というものは、仲介者を介さずにアブラハムにまずは直接与えられたもの。そしてアブラハムの子孫イエス・キリストにも、そしてアブラハムと同じ信仰に連なる私たちにも、信仰義認された者たちにもそれは与えられるものであるということです。今読んでいる 19～20 節はそのことを確認です。律法よりも約束の方がはるかに優っている。その上で律法の目的とは何なのかと。そして 21 節からそれを見たいと思います。

『²¹ とすると、律法は神の約束に反するのでしょうか。絶対にそんなことはありません。もしも、与えられた律法がいのちを与えることのできるものであったなら、義は確かに律法によるものだったでしょう。²²しかし聖書は、逆に、すべての人を罪の下に閉じ込めました。それは約束が、イエス・キリストに対する信仰によって、信じる人々に与えられるためです。』ではモーセに与えられた律法は、アブラハムに与えられた約束と食い違ひのだろうか。矛盾するのだろうか。「律法と約束は決して矛盾しない。相反することはない。」とパウロは断言しています。むしろ律法は単に約束に対して選択肢を与えているに過ぎないと言っているのです。チョイスを与えているに過ぎないと言っているのです。神様の言われたことを信じるだけで義と認められる。神の前に義とされる。それを信仰義認と言います。justification と英語で言います。その選択か、若しくは律法というものをすべて守り行うことによって神の前に義とされようとするもの、つまり行為義認。そのどちらかを選ぶようにと、律法は選択を迫るわけであります。内容として律法と約束は相反することはないと。ただし、律法には役割があるということです。私たちにチョイスを求めています。信仰義認か、それとも行為義認か。信じるだけで救われる方を選び取るのか、それとも律法の行ないをことごとく遵守

すること、それによって神の前に自らを神の前に義とするのか。そのどちらかを選ぶように。律法という言葉は、法律・規則という言葉でもあります。何でも律法・法律・規則・ルールを完全に守り行うことが出来るならば、誰でも人は義とされるわけです。法律を 100%1 つも破ることなく守っているならばその人は確かに義人と言えるでしょうけれども、それは非現実的な話であるということはこれまでも見てきたわけです。その中でも神の 10 の言葉、すなわち十戒。それはありとあらゆるこの世の法律の中で、または規則の中で際立つものです。ですから端的に十戒というものをすべて漏れなく守り行うことが出来るならば、人は誰でも義と認められるわけです。

マタイの福音書 5 章 21～22 節にイエスの言葉を見たいと思います。ここで再確認いたします。『²¹昔の人々に、『人を殺してはならない。人を殺す者はさばきを受けなければならない。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。(これは勿論モーセの十戒の一部です。)²²しかし、わたしは(イエスは)あなたがたに言います。兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでもさばきを受けなければなりません。兄弟に向かって『能なし。』と言うような者は、最高議会で引き渡されます。また、『ばか者。』と言うような者は燃えるゲヘナに投げ込まれます。』これは先週の金曜日の夜のバイブル・スタディーでちょうどカバーしたところでもあります。『人を殺してはならない。』ここにいる皆さんは、この言葉を聞いた時には「自分には該当しない。私は人殺しなんかじゃありません。殺人犯なんかじゃありません。」と言うかもしれませんが、そういうあなたに対してイエスは『兄弟に向かって腹を立てるならば、あなたは死刑である。』と。兄弟に対して『能なし』だとか『ばか者』と言うような者は、その者は燃えるゲヘナ、つまり地獄に投げ込まれると言われています。ムカっときただけであなたは人を殺したのです。誰に対しても腹を立てたことがないという人はこの中にいるのでしょうか。1 人もいないと思います。ですからすべての人は殺人犯です。ここにいる人は漏れなく人殺しであります。悪口を言ったり、人を見下すような軽蔑するような罵るような言葉を吐いたことがあれば、地獄行が定められているわけです。そしてまた同じくマタイ 5:27～28 には『²⁷姦淫してはならない。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。(これもモーセの十戒の一部です。)²⁸しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。』男性であれば女性を心の中で情欲を抱いて見るならば、もう既に姦淫罪に問われると。そして女性であっても男性をそのように見るならば同じことです。または同性愛とか両性愛というものもありますので、相手が誰であれ何であれ心の中で情欲を抱いて既に妄想するならば姦淫罪に問われると。欲情を抱くならば全員が全員姦淫罪ということです。33 節、38 節もお読みします。『³³さらにまた、昔の人々に、『偽りの誓いを立ててはならない。あなたの誓ったことを主に果たせ。』と言っていたのを、あなたがたは聞いています。(これもモーセの十戒です。要するに約束を破るな、嘘をつくなということです。それを問われればやはりここにいる人は全員律法違反をしているわけです。)³⁸『目には目で、歯には歯で。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。³⁹しかし、わたしはあなたがたに言います。悪い者に手向かってはいけません。あなたの右の頬を打つような者には、左の頬も向けなさい。』「そんなの無理です。」という人は残念ながら 48 節にあるように『天の父が完全のように、完全でありなさい。』という命令に反しているわけです。また 43～44 節にも『⁴³自分の隣人を愛し、自分の敵を憎め。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。⁴⁴しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。』これが出来ていないならば、命令違反です。「私は自分の敵を憎んでいます。迫害する者のことを心の底から憎んでいます。腹を立てているのです。あんなヤツいなくなればいいと思っているのです。死んでしまえと思っています。消えてなくなれ。視界から消えてなくなれ。この世からいなくなれ。顔も見たくない。付き合いたくもない。」そのように思っているならば、あなたは立派な命令違反者であります。48 節がすべての結論です。『だから、あなたがたは、天の父が完全のように、完全でありなさい。』もしあなたが、天の父が完全であるように完全であるならば、〇〇のことをすべて守り行わなければならないと、イエスは言われたわけです。そして、それが全部出来ているならば、あなたは完全な者と見なされて義とされます。でもそれが出来ていないならば、あなたは完全ではない、不完全な者ですから、行為義認とはならないわけです。あなたは立派な犯罪者、違反者。そして、完全でないならば、あなたは天国には行けません。不完全な者が天国に行くことは絶対にないのです。ではどこに行くかと言ったら、燃えるゲヘナです。地獄に行くと言っているわけです。大変

厳しいです。でも大変厳しいようですけれども、それが現実であります。「このぐらいいいんじゃないんですか。ちょっとぐらいいいんじゃないんですか。」私たちは思うかもしれませんが、でもこの世でもしそれが適用されたらどうでしょうか。「別に人を刺したぐらいいいじゃないですか、そのぐらい。」とか、子供を虐待して殺してしまって、または女性をレイプして「そのぐらいいい大目にみましようよ。誰もが過ちの1つや2つぐらい犯すのですから、大目に見てあげましようよ。」そんな話は私たちの現実生活においても通用しないわけです。それと全く同じようにして、天においては不完全なものは絶対に認められないわけであります。完全でなければ天国では生活出来ません。全員が全員不完全ならば犯罪者と同じですから、犯罪者は当然刑に服さなければなりません。私たちは自分には実に甘い者です。他人には実に厳しい者です。でもイエスは私たちに現実を突きつけています。人と比べると。天の父と比べると。「あの人と比べて私はまだまだマシ。良い人である。出来ている人だ。」と私たちは思って、自分を騙して、自分を慰めてしまうかもしれませんが、「人と比べてはならない。むしろあなたは完全な存在と比べなければいけない。そして完全な存在が定められた完全な律法と照らし合わせる時に、誰もが有罪である。」と言っているわけです。誰も誰1人として律法を守り行うことによっては神の前には義と認められないということ。当たり前なことなんですけれども、この当たり前のことを私たちはすぐに忘れます。パウロもこの当たり前のことをしつこく繰り返し繰り返しこの手紙を通して述べています。ガラテヤ 2:16 というところでも『しかし、人は律法の行ないによっては義と認められず、ただキリスト・イエスを信じる信仰によって義と認められる、ということを知ったからこそ、私たちもキリスト・イエスを信じたのです。これは、律法の行ないによってではなく、キリストを信じる信仰によって義と認められるためです。なぜなら、律法の行ないによって義と認められる者は、ひとりもないからです。』そのはずなのに 3章 1節では『¹ ああ愚かなガラテヤ人。十字架につけられたイエス・キリストが、あなたがたの目の前に、あんなにはっきり示されたのに、だれがあなたがたを迷わせたのですか。² ただこれだけをあなたがたから聞いておきたい。あなたがたが御霊を受けたのは、律法を行なったからですか。それとも信仰をもって聞いたからですか。³ あなたがたはどこまで道理がわからないのですか。御霊が始まったあなたがたが、いま肉によって完成されるというのですか。』と書いてあります。忘れてはなりません。私たちは人と比べるべきではありません。神と比べるべきであります。私たちは法律違反をしていないからといって自分が善良な市民だと思っているかもしれませんが、良い人だと思っているかもしれません。でも神の律法はどうでしょうか。それは私たちの心においてまず問われることです。表面的な振る舞い、品行方正な道徳的な活動をまず問うよりも、神は私たちの心をご覧になっている。心においてどうなのか。誰も律法を守り行うことはできません。全員が全員不完全な者です。律法は私たちにとって大きな役割を果たします。すぐに勘違いをする愚かな私たちに、すぐに目を閉じてしまって現実を見ようとしない盲目な私たちに対して律法はハッキリと「あなたは罪人である。あなたは律法違反者である。命令違反者である。あなたは間違いなく罪人である。あなたは不完全で完全なる罪人である。」と律法は私たちにハッキリそれを示すわけです。そして律法は私たちが罪人であることを示すだけではなくて、「だからこそあなたは自分で自分を救うことは出来ない。」律法を守り行うことは出来ないわけです。自分で自分の尻拭いをするには出来ないわけですから、私たちは誰かに助けを求めなければならないわけですから。救っていただく必要があるわけですから。それが救い主の存在です。律法は、私たちが罪人であるということをハッキリ示し、そして私たちに救い主が絶対的に必要であるということを同時に示すものであります。それが律法の大役です。大きな役割であります。律法は救いのためには必要不可欠ではありませんけれども、ただ救いの必要性を示す上では必要不可欠です。律法そのものが私たちを救うのではないのです。律法を守り行うことによっては誰も救われないからです。ただし、人が救われるためには律法にはそれなりの役割が与えられている。それは実に大事なものです。罪の自覚をもたらす、罪意識をもたらすわけです。そして救い主があなたには必要だということを明確にします。つまり自分ではもうお手上げであると。自分の力ではもうどうにもできないんだということを律法が示すわけです。そして自分ではなくて神により頼む他はないのだということを律法は教えてくれます。実に“律法”というヘブル語は「トーラー」と言いますが、「トーラー」というのは「教え」という言葉から来ています。律法は常に何かを教えるのです。あなたが罪人であるということを教えます。あなたは自分ではもうどうにもならない、誰かに救っていただく他ないどうしようもな

い惨めな存在だということを律法は教えてくれるのです。ただその律法の教えを私たちは嫌います。自分がどうい
者か知りたくないのです。如何に汚いか醜いか、どうしようもない汚れた者なのかということを私たちは認めたく
ないのです。知りたくないのです。ですから、律法に対しては目を閉じます。それと同じ理由で私たちは時に聖書を閉じ
てしまいます。聖書を開くと嫌な自分を見せられてしまう。バイブル・スタディーに来たくなくなる時もそうです。ここに
来るといつも嫌なことばかり言われる。腹立つことばかり言われる。見たくもないことを見せられる。聞きたくもないこと
を聞かされる。それがだんだん嫌になって辛くなってくると、もう聞きたくないから、もう読みたくないからということで
聖書を閉じたり、教会に来なくなります。でも、その現実を認めない限りは、救い主キリストへと私たちが導かれる事
はありません。罪意識がなければ何のための救いなのか分からないわけです。なぜ救われなければいけないのか、
分からないわけです。罪意識がなければイエス・キリストを必要とすることはまずないわけです。確かに罪を自覚する
ということには痛みが伴います。恥ずかしさもあります。汚いものを見せられるのは誰もが気持ち良いわけではありま
せん。不快な気持ちになります。病気だということを告げられなければ、だれも医者が必要としません。でも病気だ
ということを知りたくない。だから治療も受ける必要がない。病院に行く必要もない。医者に診てもらわなくても思っ
てしまうわけです。でもその認めたくない部分を認めなければ私たちは救われたいのです。命はないのです。ただ
幸いなことにアブラハムに与えられた約束というものは、信仰義認のその教理というものは、モーセに与えられた律
法よりも先に与えられているということを知って下さい。つまり恵みが律法の行ないよりも先に来たということです。何
でも恵みが先に来る。恵みというものがイニシアティブをとって、まずは私たちは恵みを頂くことが出来るというこ
です。行いが先ではないのです。恵みが先なのです。恵みというのは分不相応な者に与えられる過分な親切でありま
す。当然受けるべきでないものを受けます。まず恵みがあるので私たちはほっとするわけです。恵みが先に来
なければ私たちはもう諦めるしかない者です。正しいことが示されても、間違いが示されても、必要が示されても何も
出来ないわけです。「お前は罪人だ。」と言われたらそれまでであります。でも、恵みが先に来るのでありがたいす
ね。救い主が私たちに既に与えられております。しかしいつしか私たちは勘違いし始めて、「自分はそんなに悪い
者ではない。あの人もマシだ。それなりに頑張っている。自分は良い人。だから別に恵みをわざわざ受ける必要
はないのだ。」と、そのように思い違いをするようになります。それが私たちの肉の性質であります。すぐにガラテヤ人
のようにコロコロと変わってしまうもの。そして気が付いてみたら自分はこの約束の子孫と呼ばれる、ひとりの子孫と
呼ばれるキリスト、メシヤを必要としないと。キリストがいなくても、イエス・キリストにすがらなくても、それなりに自分の
頑張りですぐやっつけていける。生活を整え安定させそれなりに面白おかしくイエス・キリストなしでも抜きでもやっ
ていけるのだと。何の問題もないのだと。そのように思い始めてくるわけです。キリストを信じるよりも自分を信じるよ
うになるわけです。自分のやり方自分の方法自分のルールに従っていけば、それなりにうまく出来ると。それを自分を信
じて、自信を持つことというふうにも言えるでしょう。自分には出来るのだと。自分の力でうまくやっつけて成功出来
る。それを世はもてはやすわけです。自分を信じて、自分が大事なんだとか。自分の能力を信じなさい。あなたには出来
るんだと。自己啓発セミナーでも言われます。自己実現するように。そういう本が巷ではベストセラーとなっていき
ます。そして自分を愛すること。この世は奨励します。あなたには価値がある。罪人なんかじゃない。生まれながらに
あなたは愛されるべき存在としてこの世に存在しているのだと。あなたは美しい。あなたは素晴らしい。あなたは出
来る。あなたには計り知れない価値があるのだと。聞こえは非常に良いです。実際に私は自分のことなど好きにな
れないのですという人には、大変魅力的な言葉に聞こえるわけです。自分なんか何も出来ない。自分には何の価
値もない。私には出来ない。そういう人には非常に耳障りの良いメッセージとなるわけです。もっと自己尊重しなさい。
自尊感情を持ちなさい。セルフ・エスティームとも言います。また、自分を肯定するように。いつも否定的な考えを持
っている人に対しては、自分をもっと肯定して良いのだと。ありのままが良いのだと。あなたは間違っていない。あな
たが悪いんじゃない。全部聞こえは良いんですけれども、結局のところは神ではなくて自分を信じるように言っ
ているわけです。言い換えれば究極的に自分を神とする。自分を基準とするということです。神の基準ではなくて、自
分の基準。それに倣おうとするわけです。でも聖書は言います。律法を守り行うことによって人は義と認められない。

ルールさえ守っていれば、自分の思うように生きていれば、信じるように生きていれば、じゃあ救われるかと言ったら、そうではないと言っています。誰 1 人として律法若しくは自分のルール、自分の考え、自分の哲学、自分の信じる道。いろんな表現はあるでしょうけども、それらの断り、それらのルールによっては誰 1 人として神の前には義と認められないと言っているわけです。必ず失敗します。私たちには落ち度があります。私たちは不完全ですから、完全には何もかも守り行う事は出来ません。でも、この世はサタンの支配下にありますから、この世は神を抜きにしたアプローチで「神を信じなくたって、自分を信じれば、神以外のものを信じればうまくやれる。成功する、改善する、解決するんだ。」と、そのように説くわけです。最近流行っている神を抜きにした人間によってつくられた心理学もそうです。セルフ・エスティーム、自己尊重すること、それが日本の学校の教育現場でも大変もてはやされています。学校の先生たちはこぞってこのセルフ・エスティーム、自尊感情を高めること、生徒にとって子供たちにとってこれが解決だと教え込まれて、それを実践しようとしているわけです。そのような神を抜きにした心理学が教育学においても、また経営学においても適用され、自分を信じれば売上げが上がる、会社が成功するとか。そしてこともあろうに教会の中までこの考えが入り込んで、牧会学にまでこの神を抜きにした心理学が浸透して、それはハッキリ言えば“汚染”と私は言いたいと思いますが、聖書の言葉によらずに心理学の言葉によって、心理学化された牧会カウンセリング、心理学化された耳障りの良い福音。「神学においても自分を愛することが大事である。聖書には、隣人を愛しなさいとありますから。でも隣人を愛するためにはまずは自分を愛さなければならない。聖書に書いてあるでしょう。隣人を自分自身のように愛しなさいと。」確かにそう書いてありますが、ただ自分を愛しなさいとは聖書には書いてありません。でも神を抜きにした心理学はまことしやかに「隣人を愛するためには、まずは自分を愛さなければならない。自分を愛せない人は人を愛することなど出来ないから。」と、論理的に言うわけです。でもそれは非聖書的な教えであります。聖書には隣人を愛しなさいとしか書いてありません。自分を愛しなさいとは1度も命令されていないということです。また最も大切な戒めは、心を尽くし思いを尽くし知性を尽くしてあなたの神である主を愛しなさい。神を愛しなさいと、隣人を愛しなさい。この 2 つしか聖書には命令されていないわけです。それが聖書のすべてであるとイエスは要約したわけですが、その中に自分を愛しなさいとは一言も書いてありません。「自分を愛さなければ隣人を愛することは出来ない。自分を愛さなければ神すら愛することは出来ない。」恐ろしい教えであります。でもそれが教会の中でもてはやされてしまっております。そしてそれは教育現場でもそうですし、会社の経営においてもそうです。自尊感情よりもむしろ他尊感情です。自分を尊ぶのではなくて、他人を尊ぶこと。若しくは神を尊ぶ神尊感情とも言えるかと思いますが、それらを抜きにして真っ先に自尊感情を高めること。これはハッキリ言って悪であります。それこそ罪の本質なんです。アダムとエバが罪を犯したその時、そこに芽生えたのはこの自尊感情でした。自我と言ってもいいと思います。自分を過度に意識するようになってしまったのです。自分たちが裸であることに気付いたわけですが、それはまさに自分を意識し始めたという事です。それまでは自分などハッキリ言ってどうでもよかったわけです。自分を尊ぶというよりも、自分を気にするというよりも、自分のことばかり考えるというよりも、すべては神中心だったわけです。神がすべてだったんです。でもそこに罪が入ったことによって、神がすべてではなくなって、むしろ自分がすべてになってしまったわけです。人にどう思われるか。全部自分です。「私は自分のことが嫌いなんです。」これも全部自分です。そうではないんです。嫌いじゃないんです。大好きなんです。本当に嫌いだったら自分のことなど一切考えません。「自分はまだまだ、完全じゃありませんから。」それも自己卑下しているじゃないんです。それこそ自己尊重です。私たちは騙されてしまっています。まことしやかな教えによって完全にマインドコントロールされてしまっています。それが良いもの、正しいもの、その他有効なもの、それがちゃんと働く、機能するものだとこの世は私たちにまことしやかに教え込もうとしますが、聖書はそれを真っ向から否定しております。聖書は言います。『義人はいない。ひとりもない。悟りのある人はいない。神を求める人はない。』と、ローマ 3 章 10～11 節でパウロが言っています。「ありのままがいいのだ。」ウソです。聖書は、ありのままではあなたは義人ではないわけですから、罪人ですから、それが私たちのありのままです。罪人のままでいいわけではないのです。ただ罪人のままで、ありのまま私たちが恵みに与ることが出来るんです。無条件で、罪を犯していながらも、罪を抱えていながらも、罪汚れでま

みえても、そのままがいい。罪をやめて、足を洗って、すべて罪の清算をした上でクリーンになってからイエスのもとに来るようには言われていません。そのままがいいんです。ただし、そのままイエスによって救われる必要があります。イエスによって救われていないのにそのままがいい。これは完全に救いを不要とする恐ろしい考えです。ですから、この心理学の影響を受けて騙されてはいけません。ありのままがいいのはイエスに出会う時だけであります。イエスに出会ってからはもうありのままではいられないわけです。義人はいない。ひとりもない。認めなくてはいいけません。悟りのある人はいない。「精神分析学によって、心理学によって、教育学によって、経営学によって、すべてはもう悟られたんだと。こうすればいい。ああすればいい。こうすれば人はいくらでもよくなる。出来るようになる。変えられるんだ。問題は解決するんだ。」と、神様抜きに、聖書の言葉なしに悟りを得たかのようなことをあなたは聞いているかもしれませんが、それは明らかに間違いです。神を求め人もいないと言われていました。「自分の熱い信仰心によって私は神に出会ったんです。神を発見したんです。」とか、「ひたむきな探究心によって私は神を発見しました。修行と苦行の末に私は神に出会ったんです。」ウソです。聖書には『**義人はいない。ひとりもない。悟りのある人はいない。神を求める人はいない。**』と。神を求め人もいない、と言われていました。聖書によれば、あなたが神を見つけたのではなくて、神があなたを見つけて下さったという、これが真実であります。神があなたを見つけて下さった。だからあなたは神に出会うことが出来て、だからあなたはイエス・キリストを信じる事が出来たに過ぎません。あなた自身の厚い信仰心によるのではないのです。ひたむきな探究心によるのではないのです。苦行や修行の末に今の救いを得たという話ではないのです。単に一方的にたまたま神があなたを見つけて下さっただけです。**ルカの福音書 19:10** にもあります。この“失われた人”、それは私たちのことです。私たちは皆失われた人なんです。滅ぶべき者だったんです。自分で神を見出すことすら出来ない者だったんです。この言葉をイエスは取税人のザアカイに言われたんです。『**人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。**』と。罪人の中の罪人。同胞を騙してローマの手先となって法外な税金を払うように強要して、時にはローマ兵すら使って力づくでも同胞から金を巻き上げていたような忌まわしい取税人です。誰からも嫌われていた取税人です。そんなザアカイに対してイエスの方から声をかけて、イエスがザアカイを見つけたんです。ザアカイは木の上に登っていたわけですが、イエスの方でザアカイに声をかけて、そして「**きょうは、あなたの家に泊まることにしています。**」と。イエスの方から近づいて、イエスの方から一緒にご飯を食べようと。あなたの家に私は泊まる。素晴らしい恵みです。神があなたを見つけて下さったんです。せいぜいあなたのやろうとしていたことは、木の上に登ろうとしたぐらいはであります。しかし、あなた自身、神に見つけて頂く必要があるわけです。その自覚、その気付きを、ザアカイが木の上に登ろうとしたのも、それはそのようにしたいという思いが与えられたわけですが、それは律法が与えるものであります。ザアカイの中には常に罪悪感があったわけです。悪いと知っていて彼は税を取りたてていたわけでありました。ユダヤ人にとってはそれは律法と言われますが、ユダヤ人ではない異邦人には、それは良心というふうにも言われています。これはパウロが**ローマ人への手紙**で説明しています。律法のない異邦人にとって、心の律法こそ、その人のうちに植え付けられている良心というものです。両親の呵責、良心が痛むということがあります。そしてまさにそれが神から与えられたもの、律法が与えられたその結果、罪悪感、罪責感、罪意識がもたらされるわけです。また律法を持たない異邦人にも良心というものが与えられているので、良心が痛む、良心の呵責、そういうことで私たちは罪意識を持つわけです。律法はまさに鏡のようなものだとヤコブは言いました。**ヤコブの1章**に書いてあります。その律法が私たちに「**ごらんなさい。鏡の中のあなたを見てごらんなさい。如何に汚いか、汚れているか、醜いか、おぞましいものか。この鏡を覗いてごらんなさい。**」と。そしてその律法という鏡には、一点の曇りもありません。律法は完全なものです。**詩篇 19:7** にこう書いてあります。『**主のみおしえは完全で、たましいを生き返らせ、主のあかしは確かで、わきまのない者を賢くする。**』“みおしえ”という部分は、ヘブル語で『トラー』と言います。ですから、『**主の律法は完全でたましいを生き返らせ**』と訳すことが出来ます。主の律法、これは完全です。人間の律法も優れています。人間の法律も優れていますが、主の律法こそ完全なもの。人間の作る法律は完全なものもあります。不完全だからこそ法律は書き換えられるわけです。憲法を改正するとか、いろいろ時代時代法律というものは再解釈されたり、また再編されたりするわけです。

しかし神のみおしえ、神の律法は完全ですから、書き換えられる事はありません。普遍的なものであります。そして完全だからこそ、ここでは『**たましいを生き返らせる**』とあります。『**回心**』というふうにも言い換えることが出来ます。もちろん律法そのものが人を救うのではありませんが、ただこの完全なる律法に耳を傾ける者、この完全なる鏡のような律法にしっかりと向き合う者、この律法の言わんとしていること、指し示そうとしていることをしっかりと受け止める者、つまり律法によれば、この鏡によれば、あなたは罪人であって、そしてあなたには救い主が必要である。そのことを理解して受け止める者には、たましいを生き返らせる、回心させる、救いをもたらすと約束されています。**ローマ 7:7～14**も参照したいと思います。『**それでは、どういうことになりますか。律法は罪なののでしょうか。**（罪を指し示すので私たちにとって律法はあまり良くないものだと思われてしまうわけです。嫌なものだと思われてしまいます。律法主義なんていう言葉を聞くと私たちは震えあがってしまうわけです。律法と聞くだけで嫌なイメージを持ちます。でも、）**絶対にそんなことはありません。**（と、パウロは言います。）**ただ、律法によらないでは、私は罪を知ることがなかったでしょう。**（自転車乗りの2人乗りは罪です。「知りませんでした。」と、でも実際には法律には自転車乗りの2人乗りは罪だとあるわけです。法律がなければそれは罪だと分からないわけです。それと同じように律法によらないでは私は罪を知ることがなかったでしょう。道端に落ちている100円玉を拾ってポケットに入れてしまうのは罪なんです。「ラッキー」と思って、「今日はついていた。」自動販売機にお釣りが残されていたとか。またはスーパーで余分にお釣りを貰って「今日はついている。儲かった。」届け出をしない。それは法律違反なんです。それはネコババと言います。勿論重い罪には問われませんが、ただそれは法律違反であります。ちゃんと警察に届けなければいけないのです。1円玉でも、10円でも、100円でも。それが本来すべきことなんです。クリスチャンならば、そのようにしなければ法律違反だということです。それに加えて神の前にも律法違反だということです。）**律法が、「むさぼってはならない」と言わなかったら**（食欲の罪です。これも十戒にあります。）、**私はむさぼりを知らなかったでしょう。**⁸ **しかし、罪はこの戒めによって機会を捕らえ、私のうちにあらゆるむさぼりを引き起こしました。律法がなければ、罪は死んだものです。**（律法を知れば知るほど自分がどれだけの罪を犯してきたのか。聖書を開けば、自分がどれだけおぞましい罪人なのかということまざまざと知らされるわけです。「こんなことだったら聖書を開かなければ良かった。」と思ってしまうほどであります。鏡の中の自分にショックを受けるわけです。「あれも罪、これも罪。知らなかった。自分はこんなにも恐ろしい罪をこれまで知らずに無意識のうちにも犯してきてしまった。なんということか。なんとしたことか。こんなにひどい奴だったとは思わなかった。こんなひどい人間だったとは思わなかった。自分自身にショックです。」と、私たちは思います。だから聖書を開きたくなくなってしまうのです。だから教会にも行きたくなくなってしまうのです。でもそれを認めなければ私たちは違反者のままなのです。おぞましい汚らしい罪人のままなのです。醜いままで一生を終えなければいけません。ただ鏡を見ないで生きようとするだけです。現実は何も変わっていないわけです。)⁹ **私はかつて律法なしに生きていましたが、戒めが来たときに、罪が生き、私は死にました。**¹⁰ **それで私には、いのちに導くはずのこの戒めが、かえって死に導くものであることが、わかりました。**（あなたは罪人である。このままではあなたは裁きに服することになる。死刑だということです。)¹¹ **それは、戒めによって機会を捕らえた罪が私を欺き、戒めによって私を殺したからです。**¹² **ですから、律法は聖なるものであり、戒めも聖であり、正しく、また良いものなのです。**』実際に律法が私たちを殺すのではなくて、律法は裁くだけで殺す事はしません。殺すのは罪です。罪から来る報酬は死であると**ローマ 6:23**に書いてあります。死をもたらすのは律法ではなくて罪なのです。ただ律法は違反者に対して罪に定める裁きはしますけれども。死刑執行人は実際には律法そのものではなくて、あなた自身の罪だということです。ですから律法そのものは聖であって正しいもので良いものであると、パウロは言っています。勘違いしないで下さい。律法は悪いものではないのです。あなたに現実を見せる鏡だからといって、鏡が間違っているのではないのです。鏡はありのままのあなたを映し出すだけです。それが嫌だから人はこの鏡を見ようとしませんし、むしろこの鏡を破壊しようとしています。だから聖書から離れてこの世の教え、先程紹介したような心理学や自己啓発に奔ろうとするわけです。その方が聞こえが良い、耳障りが良いからです。心にとって負担が少ないからです。不快な気分をしなくて済むからであります。嫌な思いをしなくていいわけです。そしてイエス・キリストという方も鏡の

ような方です。ですからイエスを亡き者にしようとするわけです。「除け、除け、十字架につける。」と言うわけです。鏡を壊してしまえば見ることがないと。そのように人は考えるわけです。だからクリスチャンを迫害するのは。クリスチャンと一緒にいると気分が悪くなる。自分が間違っているように、自分がどうしようもない罪人であるかのようにいつも嫌なところを見せつけられてしまう。光を当てられてしまうから。自分がなっていないということをこの人たちが私に暴露するようにして見せつけてくるので、だから私はクリスチャンたちとはあまり居たくないです。ノンクリスチャンと居る方が気が楽です。勿論クリスチャンも律法主義になってしまえばパリサイ人や律法学者と同じで罪人たちは居心地が悪くなりますけれども、イエスは罪人の友となられてザアカイの家に寝泊まりされた方です。ですから確かにイエスを前にして誰もが罪人であって救い主を必要とする者となりますけれども、でもそのイエスには恵みがあつたわけです。このイエス・キリストの内には恵みと真があつて、真だけではなくて恵みがあつたわけです。そして恵みの上にはさらに恵みが増し加えられて、最初は罪を示されて居心地が悪くなっても、それでもそんな私を赦して下さるお方が私の救い主である。そのお方が私のすべての罪をあの上で負って、あんな惨めな姿、あんな無残な姿に成り下がって下さった。有難いし、嬉しいし、そんなお方は他にはいない。命の恩人以上の方である。私のために罪の保釈金も払って下さった。罪の借金のすべてをこの方が代わりに弁済し下さった。この方が私のすべての罪を負って代わりに刑罰を受けて下さった。代わりに死んで下さった。代わりに恥を受け、代わりに神の怒りを受けて下さった。そのイエス・キリスト私たちは救い主として頂いているわけでありませう。でもこのイエス・キリストを必要とする、心底必要とする。「この方がいなければ私はもうダメだ。終わりだ。」と、そう思えるまでには、どうしてもこの鏡が必要なんです。鏡を見なければきれいにしてしまおうと思わないわけです。鏡を見なければ自分の罪の現実を見ることは出来ないわけです。

そして最近の、現代のと言っていいと思いますが、流行の伝道手法というものには行き詰まりが既に生じております。伝道しても人が全然救われないうし、救われたと思ったのにいつの間にかその人たちは教会に来なくなる。また元の生活に逆戻りしていく。いろんなプログラムをもってしても、ノンクリスチャンにも分かりやすいように、教会の敷居が高くないように、いろんなエンターテイメントも使ってこの流行やいろいろなテクニックを使って福音をわかりやすく伝えてみるものの、ちっとも救われてこないし、ちっとも教会に定着しない。一体どうということなのだろうか。行き詰まりを覚えている人たちも多いと思います。これを簡単なたとえで皆さんに考えて頂きたいと思います。日本から例えばハワイに飛んでいる飛行機で、フライト中に燃料タンクにヒビが入って穴が開いて燃料が漏れているということにパイロットは気付きました。あと2時間しかもたない。2時間後には燃料が尽きて飛行機は墜落して太平洋に落ち海の藻屑となってしまふ。その恐ろしい現実をパイロットは客室乗務員、フライトアテンダントに伝えます。なんとか乗客に伝えてもらいたい。自分は今必死になってなんとか飛行機をすぐに落ちないように操縦しているので、なんとかうまいこと分かるように、乗客たちにこの現実を知らせてもらいたい。そしてこのフライトアテンダントは乗客に思いつき笑顔でこう言います。「これより皆様には救命具を無料で進呈したいと思います。この救命具さえあれば、これから先も安心ですし、安心してフライトを楽しむことができます。この救命具さえあれば、愛と喜びと平安に満ちてこれからも空の旅をエンジョイすることができます。この救命具が欲しい方がいらっしゃれば、今日特別無料で無償でお分けすることが出来ます。どうでしょうか。」乗客の2、3人が手を挙げます。「じゃあ、今から頭を下げ一緒に祈りましょう。祈った人にはもれなくこの救命具を進呈いたします。」そしてその人たちはその通りにして救命具を手に入れます。そして実際にその救命具を身に付けてみます。ちょっとしめつけられてきつい感じがします。そして勿論重みも肩に感じますので、ちょっと今までとは違って不自由な感覚を持ちます。しめつけられているような重たい感覚です。そして、それを身に付けたからといって何も起こらない。愛だとか、喜びだとか、平安が約束されるとは聞いたけれども、そんなものは全然感じない。むしろ他の乗客たちは救命具を身につけている自分たちを見てせせら笑っているように、馬鹿にされているように感じる。待てど待てど、愛、喜び、平安なんて、この救命具を身につけていたって何も感じない。むしろ感じるのは締め付けだとか、重荷だとか、または周囲の冷ややかな目、馬鹿にされているようなその視線。こんなもの、もう要らない。外してしまえ。愛、喜び、平安なんてもの、ちっとも味わえない。ちっ

ともそんなもの感じない。むしろ束縛だとか、重荷だとか、軽蔑、迫害、そんなものしかない。今日現代における伝道の結果として、似たようなことが起きているということを皆さんも知っていると思います。イエス・キリストを信じます、と言いながらも、だんだん縛りがきつくなってきて、締め付けられているようだ、束縛されているようだ。重荷を感じるようになります。そして周囲から馬鹿にされているように思います。それがだんだん負担になってくると、イエスから離れてしまう。教会から離れてしまうわけです。

ここにもう1人のフライトアテンダントが、客室乗務員がやってきて、ハッキリこう言います。「この飛行機に不具合が生じました。実は燃料タンクに穴が開いていて、燃料が確実に漏れています。このままでは2時間後には墜落するとパイロットは言っております。でもそれを聞いたのは1時間半前なのであと30分後には間違いなくこの飛行機は墜落いたします。皆さんにはこの救命具があります。これが必要な方、これが欲しい方、いらっしゃるでしょうか。」と言った途端に乗客は大半の人は全員が手を挙げて殺到して争うようにしてその救命具を我が物にしようと躍起になってその救命具を求めるようになります。この違いを皆さんに考えて頂きたいと思います。

最初のフライトアテンダントは、飛行機が墜落するという現実は一切触れませんでした。耳障りの良いことだけ言って「救命具がタダでもらえる。そして救命具を身につければ、〇〇の特典があります。これであなたは安心して生活出来ます。何の不安もなく、むしろ喜びだとか、愛だとか、平安を持って生きていくことが出来ます。」でも反応は薄いわけです。ほんの数名しか手を挙げて、それを求めようとはしませんでした。

その一方で、もう1人の後者のフライトアテンダントは、ハッキリと最初から現実を告げたわけですが。「このままでは飛行機は墜落します。全員死にます。助かりたいですか。助かりたいなら救命具が必要不可欠です。これが欲しいですか。必要ですか。」と。殺到したわけですが。でもそれを聞くと「そんな恐ろしいお話、そんな厳しいお話をしたら、人が気を悪くするじゃないですか。だから私たちは、罪だとか、裁きだとか、地獄だとか、悔い改めだとか、そういう否定的な事は言わないんです。それだけで耳を閉じられてしまっただけは身も蓋もないので、私たちは良い知らせを告げ知らせる者ですから、良いことを言うんです。受け止め易いこと、受け入れ易いこと、分かり易いこと、耳障りの良いことを言うんです。」それが現在の典型的な伝道方法であります。たしかにローマ2:4には、神の慈愛が私たち罪人を悔い改めに導くと書いてあります。神の厳しさが人々を悔い改めに導くのではないと。でも実際のところ神の慈愛だけではなくて神の厳しさ、言い換えれば律法の現実というものも人を悔い改めに導くことがあるということを私たちは知らなければなりません。恵み無しに誰も救われません。でも恵みが示されるためには、恵みがより有難いものとして受け止められるためには、恵みが喉から手が出るほど欲しいですと人々に意識させるためには、この神の厳しさ、この律法の現実というものも時には知らされる必要があるということです。それを知らされなくても勿論救いに与る人たちもあるわけですが、でもそれが知らされないが故にちっとものる気がしない、信じる気がしない。そのような頑なな人たちも存在するということです。神の慈愛も必要ですし、神の厳しさも示される必要があるということです。律法は、主のみおしえは完全でたましいを生き返らせると先ほど詩篇19:7で読んだばかりです。律法の現実を明確に語る必要があります。イエス・キリストを信じなければ、あなたが何者でも、社会的地位があろうと、品行方正であらうと、法律違反などしていないと言ったところで、犯罪歴がゼロと言ったところで、皆から良い人・尊敬される人と言われても、イエス・キリストを信じなければあなたは地獄行だということです。それが律法の現実ということです。代議士だろうと、弁護士だろうと、消防士だろうと、警察官だろうと、学校の先生だろうと、生徒だろうと、年寄りだろうと、若者だろうと、誰もがイエス・キリストを信じなければ救われません。そのまま墜落して奈落の底に落ちていくわけですが。皆さんは自分の言葉で福音を宣べ伝えていると思います。自分がイエス・キリストに出会ってどんなに人生が変えられたのか。そのような証しを皆さんも不信者に、ノンクリスチャンにしていると思うんですけれども、その結果聞いている人たちが「それは結構なお話ですね。大変良いお話ですね。あなたの人生がそんなにも変えられたなんて素晴らしいです。それは良かった。それは有難いことですね。キリスト教があなたに合っていたんですね。」そのような反応がたまにあります。まるで人ごとのように。「それはあなたにとっては良かったですね。クリスチャンと呼ばれる人たちは受け入れることが出来て良かったですね。キリスト教がその人たちに合っているということですね。でも

他の宗教もあるじゃないですか。他の考えもあるじゃないですか。あなたの信仰は否定しません。そしてあなたの身に起こった事は良かったことですね。」と認めはします。でもそれを自分のこととは考えないわけです。自分に当てはめようとしないわけです。そのような傲慢な人たちには、ハッキリと律法の現実を示す必要があります。あなたの言っていることを肯定して認めてくれて「それは美談ですね。それは本当に良かったですね。そんなところから救われてきたんですか。素晴らしいですね、感動ですね、感謝ですね。180度人生が変えられてさぞかしあなたの両親も喜んだことでしょう。生きがいを見つけることが出来て良かったですね。キリスト教、素晴らしいですね。あなたに合っていたんですね。でも私は〇〇がありますから結構です。私は禅をやっているんです。私はヨガをやっているんです。私は心理学のサイコセラピーを受けていますから、別に結構です。カウンセリングを受けていますから別に結構です。自己啓発プログラム、これが私に合っているんです。だから別にキリスト教は私には必要ありません。あなたにとってそれがキリスト教でうまくいったかもしれない。私には別に他のものがありますから結構です。より良い人生を送るために、最高の人生を送るために、成功を手にするために私にはこのような開発プログラムがありますから結構です。」そのような傲慢な人には、律法の現実をつきつける必要があります。

18世紀のアメリカの最大のリバイバルスト、大覚醒のリバイバルストとして名高いジョナサン・エドワーズという人が『怒れる神の御手の中にある罪人』という有名な説教をいたしました。これによってアメリカ人の多くが大覚醒した。覚醒するというのは、目が開かれた、目覚めた、そして神に立ち返ったということです。その結果沢山の人が大挙して救われたので、神に立ち返ったので、リバイバルと言われたわけです。そのリバイバルをもたらした説教、それは『怒れる神の御手の中にある罪人』というものです。もうそのタイトルを聞くだけで耳を塞ぎたくなるかもしれません。その中でジョナサン・エドワーズは「新生していない者は、新しく生まれていないノンクリスチャンは、怒れる神の御手の中にある。神はそれらのものを嫌い、彼らに対して神の怒りが燃え上がっているんだ。」と、その現実をジョナサン・エドワーズは突きつけたわけです。キリストを信じて神の怒りから、迫り来る滅びから逃れなければならないと、ジョナサン・エドワーズはアメリカ国民に向かって語りました。このようなアプローチは律法を知っているユダヤ人に対するアプローチと同じです。アメリカ人は、当時は当然アメリカの土台、アメリカの憲法そのものはすべて聖書に基づくもの。キリスト教信仰に基づくものですから、彼らは聖書を知っていたわけです。彼らは神を、イエス・キリストを知っていたわけです。知っていながらも、聖書から外れた生活、罪の生活を送っていたので、ジョナサン・エドワーズは明確にこの律法の現実をつきつけて「このままでは永遠に滅んでしまう。あなたたちは神の怒りの対象となっている。」ということをはっきり告げたわけです。これを福音を聞いたこともない国でいきなりするのは勿論間違いとなります。日本人で聖書なんか聞いたこともない、イエス・キリストの名前なんか聞いたこともない、そういう人に対していきなり「あなたは地獄に落ちる。」とか、それはまずは神の律法を知らないわけですから、知らない人には、心の良心にも勿論訴えることは出来ませんが、まずは神の慈愛、そこから始まるわけです。でも知っている人には、分かっているのに拒んでいる、そういう頑なな人にはいきなりストレートに神の律法の現実を「このままではあなたは神の怒れる御手の中で滅んでしまう。」ハッキリ告げる必要があります。ですからまだ聞く耳のある人たちにはただただ神の恵みを、神の慈愛を宣べ伝えればいいわけです。耳障りの良い話をするというよりも、本当に神の成されたことの素晴らしさ、イエス・キリストの愛、それを伝えればいいわけです。でもそれを伝えた上で信じようとしない人たち。「あなたの罪の保釈金をイエス・キリストが命の代価をもって払って下さった。あなたのすべての罪の借金をイエス・キリストがあ十字架の上で完了したと宣言して完済して下さい。」それを宣言しても人ごとのように捉えようとする人たち。イエス・キリストが実在したことも認め、イエス・キリストが十字架にかかって死んだことも認め、「でもそれは別に私とは関係ない。あなたはそれを自分と関係あることとして、そしてあなたはそれを信じたことで救われたならば、それで人生が変えられたならば素晴らしい。でも私は別にイエスなど必要ない。他のものがあるから。」そういう人たちはハッキリ告げられる必要があると言っているわけです。

イギリスの有名な牧師でもあり神学者でもあるJ・I・パッカーという人はこう言っています。「キリスト教伝道者たちは、地獄について宣べるべきである。それは彼らの任務の一部である。伝道者たちは彼らの隣人の不信者への救助布

教のためにいるのである。そして誠実な者として、キリストから離れたらどのような危険が彼らに伴うかを説明することを率直に引き受けるべきである事は当然な、そして必要なことである。イエスと使徒たちによると、個人の命は体の死後も継続する。そしてこの世でキリストを信じない人たちの将来は、最悪で最も恐ろしいこととなること。そしてすべての人はそのことを告げられるべきである。」と。キリスト教伝道者たちは地獄について宣べるべきであると、J・I・パッカーは言ったわけです。

また D・M・ロイドジョーンズという同じくイギリスの著名な牧師はこう言っています。「人がキリストのもとへ導かれ、キリストのみに信頼するようになるのは、ただ罪の正しい認識によるのである。地上最悪の罪人とは、自己満足し自己完結している善良で道徳的な人々であり、今の自分のままで神の御前に立つに相応しいと信じている人々である。全宇宙で最悪の罪人とは、自分にキリストの血が必要であることを全く見てとったことのない人である。それより大きな罪は無い。殺人も姦淫も不品行もそれと比べればに無に等しい。」と。

「別に私は人殺しなんかしていません。不倫なんかしていません。」でももしその人がイエス・キリストを信じない、必要としないならば、最悪の罪人であるとロイドジョーンズは言ったわけです。

また同じくロイドジョーンズは「罪とは究極的には自己崇拜、自己に媚びへつらうことである。」自分は良い人。自分には価値がある。自分には出来る。自分は悪くない。嫌いになる必要は無い。もっと自己を尊重しなきゃいけない。それは自己崇拜と、また自己に媚びへつらうことであると。それこそが罪であると。サタンは私たちに罪を犯すことを奨励しているわけです。ますます罪に陥るように助長すべく耳障りの良いことを言うわけです。勿論サタンは「もっと人を殺せ。」とか、「もっと沢山の女と寝ろ。」とか、「もっと不品行を犯せ。」とか、そういう事は言いません。そんなことを言われても人には抵抗があって、良心に呵責が生じたり、法律違反ということになりますから、そういうあからさまな分かりやすい誘惑はしません。サタンをもっと耳障りの良いように「自己啓発セミナーがありますよ。」とか、「セルフ・エスティームが教育の解決である。」とか、「これによって人は自分を受け入れられるようになる。セルフ・イメージをもっと高めれば、自分を自己受容して、そうすれば人ともちゃんと話せるようになるし、引きこもりから解放される。そして勉強も手につくようになって社会にも出られるようになる。人間付き合いも健全化され。」聞こえが良いですけども、でもそれらはすべて聖書によれば罪だということです。

他にも同じくイギリスの牧師、宣教師、日本にも来たことのある宣教師です。バークレー・バックストンという人。この人は「深い認罪こそやがて徹底した救いを得させる唯一の道である。」唯一の道だと言っています。救いを徹底する唯一の道。それは「飛行機が落ちますよ。このままでは全員死亡です。」と。そうすれば徹底的に人々は何としてでも助かろうとしますので、救命具を躍起になって手に入れようとしています。でも別に飛行機が落ちることが告げ知らされていなければ、ただ救命具が提供されると聞いても、別に必要性を強く感じませんし、実際に飛行機が墜落するとも思っていない人たちは、救命具を手にしたところでその価値を知る事は出来ませんし、実際にそれがかえって負担、かえって面倒、「本当にこんなもの必要ない。」と思い始めてしまうわけであります。

日本の牧師でいろいろ牧師として皆さんにも紹介したこともある(「ちいろば」とは小さいロバ。)自分はイエス・キリストを背に乗せたあの小さな雌ロバの子、子ロバになりたいと言った榎本保郎という人はこう言いました。「今日のキリスト教の大きな問題は罪の^{もた}悶えがないこと。自分の罪に対する悶えがないから、赦された喜びもない。罪に対する知識はあっても、意識がない。」「ああ、そうですか。」「くらいの罪人だという、罪に対する知識はあっても、意識がない。」と。クリスチャンは皆知識を持っています。「これも罪、あれも罪。」でも知識ではなくて、意識です。この意識がないので、他の人が姦淫の罪を犯せば目くじら立てて「ひどい罪だ。」と。他の人が罪を犯せば、それで不快な思いをして、そして自分はそういうものでなくて良かったとすら思うわけです。そして心の中で人を裁き、心の中で人に対して腹を立てているわけであります。でも一度罪意識を持つならば、もう人が何をしようと関係ないわけです。関係ないというよりも、気にならないわけです。人よりも自分の罪が神の前にどのようなものなのか。この罪意識というのは真っ先に自分と神との関係の中で覚えなければいけないものです。人があなたと神の関係には入り込んで来ないわけです。「ああ、そうですか。」「くらいの罪人、それが私たち多くの者の姿ではないでしょうか。」「ああ、そうですか。」「く

らしい罪人であってはいけません。「我こそは罪人の頭である。あの人も罪を犯した。でも私もあの人以上のことをしている。あの人と同等のものである。同じほどの罪を犯している者だ。いやむしろあの人よりも私の方がはるかに汚れた者である。」そのような意識がなければ、イエス・キリストがあのかross架の上でなされたこともそれほど有り難いこととは思えないわけです。だから喜ばないのです。だからいつも何か暗い感じなのです。クリスチャンの中で喜びに満ち溢れていない人たちにおいて共通している問題は、罪意識がないということです。若しくは薄いということです。本当に自分の罪の意識があるならば、あなたはイエス・キリストの成されたことに、もう感動しているはずで、「こんな有り難い事はない。」もう涙を流して感謝しているはずで。がっかりしているとか、失望しているとか、落ち込んでいるとか、不平不満を言っている。そんな暇なんかないわけです。あなたの身代わりにあなたの一つ一つの罪をイエスがあのかross架の上で負って下さった。そのためにありとあらゆる痛みや辱めや罰を受けて下さった。そのことが分かれば分かるほど、あなたのうちからは言葉に言い尽くせない喜び、感謝が、賛美が溢れてくるはずであります。なぜそのような喜びが溢れてこないのか。それはあなたが榎本保郎牧師が言う通りの「ああ、そうですか。」くらいの罪人程度の意識しかないからであります。赦された喜びなどないんです。「あの人の罪が許せない。」指ばかり差しているだけです。「なぜあの人があんなことを言うのだろうか。あんなことをやるのだろうか。」人のことばかりで頭がいっぱいです。「イエス・キリストが自分のためにして下さったこと、それだけで胸がいっぱいです。」と。それが本来クリスチャンのうちに見られる姿であります。

次にガラテヤ 3:23~24 に移って頂きたいと思います。『²³ 信仰が現れる以前には、私たちは律法の監督の下に置かれ、閉じ込められていましたが、それは、やがて示される信仰が得られるためでした。²⁴ こうして、律法は私たちをキリストへ導くための私たちの養育係となりました。私たちが信仰によって義と認められるためなのです。』特にこの 24 節のところに見られる『律法が養育係である。』とありますが、*印では欄外を見て頂くと別訳として『家庭教師』となっております。養育係でも、家庭教師でもどちらでもいいんですけども、ちょうどパウロの時代、裕福な主人が自分の子供の教育のため、また道徳教育も含めて人格形成のためにも生活管理のためにも、信頼出来る奴隷を雇って養育係としたわけです。家庭教師としたわけです。だいたい 6 歳から 16 歳の間、自分の子供にこのような養育係を付けたわけです。全生活を監督させるためです。勉強も教えましたけれども、ただ道徳も教えたり、またその子の安全を保障するためにも監督係として外出する時には必ず養育係がその子どもに付いて行ったわけです。学校に行く時も送り迎えもしたわけです。その養育係には主人からの絶対的な信頼が与えられていましたので、時に子供が言うことを聞かなければむちを持って言うことを聞かせても良いとすら、その権威すら与えられていたわけです。そのような養育係と律法が重ねられております。24 節の直訳は、**律法はキリストへ導く**というよりも『**キリストまでの私たちの養育係**』となります。24 節の『**律法は私たちをキリストへ導くための**』という部分は原文にはありません。単に『**律法はキリストまでの私たちの教育係(若しくは家庭教師)**』それを意識として分かりやすくするために『**へ導くための**』という言葉が補足されているわけです。その補足があっても全然問題はないですけども、ただ直訳の中で押さえないニュアンスは、律法は『**キリストまでの私たちの養育係**』であると。つまり、もうキリストへたどり着いたらもう養育係の役目は終わるということです。不要となるということです。

内村鑑三は「**律法は人を救えない。しかし、人を救う準備をする。**」と述べました。その「**人を救う準備をする**」のが律法と呼ばれる養育係、家庭教師、子供の全生活を監督する監督者であり、また保護者である存在です。でもキリストへ導かれるならば、キリストが来られたならば、もう養育係の役割は終わります。6 歳から 16 歳まで養育係が面倒を見ても、それ以降は養育係ではなくて、もう成熟した者となってむしろキリストがこれからは導いて下さると。

そして『**信仰によって義と認められる**』という言葉がこの 24 節でもう一度繰り返されています。これは勿論法律用語ですので、罪をこれまで犯したことの無い、全く犯罪歴の無い、まっさらな者として認められるということです。単純に無罪を宣告されるとか、状況証拠が足りないから、証人がいなかったから、だから非常に疑わしいけれども無罪とするとか、または罪は確定しているけれども特別に赦す、恩赦で無罪とするという意味ではないのです。そうではなくて、これまで 1 度も罪を犯したことの無い者のようにみなして下さる、完全に過去の罪の犯罪歴は消去される、クリアな

ものとなって 1 度も罪を犯したことの無い者、つまりイエス・キリストと同じ罪なしという存在になると言っているわけです。これはコロサイ 2:14 にもパウロが説明しているところでもあります。『いろいろな定めのために私たちに不利な、いや、私たちを責め立てている債務証書を無効にされたからです。神はこの証書を取りのけ、十字架に釘づけにされました。』もう犯罪レコードはありません。今は無罪とされているけれども過去にはこういうことをやったんですとか、そういうことはもうないと言っているわけです。もう過去の記録は残っていない。何もなかったわけです。なかったものとみなされるというのが、この「義認」という言葉です。ですから勘違いしないで下さい。神様が大目に見て赦されたのではないのです。神様があなたの罪に対して目をつぶって赦したのではないのです。すべては水に流すというような赦しではなくて、すべては御子の血によって流すと。神は私たちのために御子をすら与えて、その罪の処理が完全なものとなるようにイエス・キリストを遣わして、そして神の律法違反が完全に御子の贖いの死によって、命の代価によって法的に正しく処理されることを望まれたわけです。大目に見て赦すとか、目をつぶって赦すとか、単純に水に流してなかったことにしようというような程度のいい加減な赦しではなかったということです。もう誰からも指をさされない赦し。法的にも文句ない赦し。サタンがいくら責め立てようと「牧師は過去にあんなことをやった。今あんなふうに偉そうに言っているけれども、あんなこともやった。こんなこともやった。」とサタンは私を責め立てます。でも私はこのイエス・キリストにすがって罪赦された者として、義と認められた者として、サタンの誘惑にいちいち耳を傾ける必要はありません。貸す必要はないのです。もうそんなものはないと。そんな過去はないと。すべてイエス・キリストが帳消しにして下さったから。神はあなたの罪をすべて赦して下さるだけではなくて、すべて忘れて下さって、もう思い出さず事はないと宣言されているわけです。それを私は信じているのです。神の言葉を信じているのです。私は自分を信じているのではありません。神の言葉を信じているのです。アブラハムは神の言葉を信じました。神の約束を信じたのです。その信仰が義と認められたのです。ですからあなたの記憶にもサタンが指摘する通りの記憶が残っているかもしれません。確かにサタンが言う通り、私はあの日あの時ああいうことを言った、やったと。あなたの脳にはその記憶が刷り込まれているかもしれません。忘れてたくても忘れられない。でも、あなたはキリスト・イエスにあって新しく造られたものです。もう古いものは過ぎ去っているのです。ですから過去はもう過去として、もうそれはイエス・キリストの血潮によって全部クリーンになっているわけです。だから脳の中にどんなに記憶が残っていても、もうそれを持ち出す事はしなくてもいいのです。それはもう事実ではないのです。事実、霊的現実、あなたの罪はすべて赦され、神はすべてのあなたの罪を忘れて下さっている。これが事実です。あなたの脳にある事は事実ではないのです。サタンの言うことが事実だと思ったら大間違いです。「サタンの言う通り、だって私は確かにあの時ああいうこともやった、こういうこともやったし、それは私の記憶にしっかりと刻まれてしまっているから。だからサタンの言う事はもっともです。だから私はふさわしくないのです。私のような者は、私のような罪深い者は。」サタンの囁きはすべて嘘だということを知って下さい。サタンの言うこととあなたの記憶に残ることが合致しても、私はそれ以上に神の言うことを信じます。神の言うことこそ真実であります。サタンは最初から嘘つきです。偽り者で最初から人殺しであります。私はそういう意味では自分を信じません。自分の脳にあることを信じません。自分の感情において抱くことも信じません。それは古い自分が反応することです。古い自分の中に残るかけらであります。人が何と言おうと、サタンが何と言おうと、私はキリスト・イエスにある新しく造られた自分、それが現実であるということを信じます。つまり、すべての罪は赦され、すべての罪は忘れ去られた。そのことを私は信じます。そのことをあなたにも信じて欲しいと願います。

ですから 25 節。『しかし、信仰が現れた以上、私たちはもはや養育係の下にはいません。』律法の役割はもう終わったんです。罪が示された。それは罪意識をもたらし、そして救い主が必要である、その必要性を示すことでありましたが、もうキリストが来られたので私たちにおいては、この責め立てられる必要性がなくなったということです。この律法の役割はもうなくなったということです。

26 節を見て下さい。『²⁶あなたがたはみな、キリスト・イエスに対する信仰によって、神の子どもです。』素晴らしい特権が与えられました。神の子どもに罪人は 1 人もおりません。神の子どもに出来の悪い者はいません。神の子ども

にセルフ・イメージがガタガタなんていう人はいません。神の子どもは皆神のかたちに造られたキリスト・イメージを持っている者です。ですからクリスチャンはセルフ・イメージがどうのこうの、そんなつまらないくだらないことにはもう捉われません。神の子どもは神のかたちに造られたものですから、自分のかたちにはもうこだわらないのです。キリストのかたちにこだわります。自分がどう感じるか、自分がどう思われるか。そんな事はもうどうだっていいんです。関心事はキリストのみです。強いて言えばキリスト・イメージ、それだけが気になります。キリストの御名を汚さないように。自分の名前が汚されようと、自分の名誉を失おうと、自分がどう思われようと、嫌われようと、馬鹿にされようと、見下されようと、そんなことはもうどうでもよくなるわけです。自分のイメージ、そんなものはもうどうだっていい。むしろキリスト・イメージ、これが何よりも大事であると。勿論それを自分で形づくることは出来ませんし、自分でキープすることは出来ないわけです。でも幸いパウロが言う通り、私たちは栄光から栄光へとキリストと同じ姿に変えられていくのです。自分で変えるのではなくて、変えられていくのです。そしてそれはあなたの自助努力によるのではなくて、**御霊なる主の働きによるのです**と、聖書にそのように書いてあります。それを私は信じます。自分でキリストのかたちを自分のうちに形づくることは出来ません。いわゆる敬虔なクリスチャンになることを、苦行や修行や厚い信仰心やひたむきな探究心によって実現するという事、それは出来ません。それはただの自己実現、自己啓発に過ぎません。それと同じことを私は信仰の世界においてやろうとはしません。信仰の世界においては、もう自分という主体は消えてなくなります。自分が主ではなくて、イエスが主なんです。ですからイエスに働いて頂くのです。自分の努力はもう必要ありません。イエスがすべてのことをして下さったから。それを信じるだけでいいのです。信じるだけで救われる。信じるだけであなたはキリスト・イエスのかたちに似てくるということです。

27 節を読みます。『**バプテスマを受けてキリストにつく者とされたあなたがたはみな、キリストをその身に着たのです。**』強いて言えばあなたはキリストを着るだけです。キリストを脱いでしまえば、ただの恥ずかしい裸のおぞましい罪人であると。キリストを着ているから、あなたは義と認められた神の子どもと見なされるわけですがけれども。クリスチャンは誰もがキリストを着ている者であります。バプテスマというのは文字通りは「浸すこと」を意味する言葉です。キリストのうちに浸っている者、それがクリスチャンです。キリストに浸るとどうなるか。だんだんキリストの色に染まっていくわけです。セルフ・イメージがだんだんキリスト・イメージに変えられていくわけです。この世は自分を生かすように主張します。でも聖書では、キリストによれば「自分を殺すように」と言います。「自分を捨てるように」と言います。この世は如何にしてセルフ・イメージを良くするか、自尊感情を高めるかと。自分を生かすように、自分をよりよくするように。それと逆行するように、全くの逆説です。聖書は、イエス・キリストは、反対のことを言います。「自分を生かしてはいけない。自分を生かす者は、自分を見失う、命を失う。でも自分の命を失う者は真の命を得る」と言っているわけです。自分に死ぬことをイエスは求めます。古い自分を脱ぎ捨てることをイエスは求め、そして「私を着なさい。」とイエスは言います。

エペソ 4:21~24をお読みします。『²¹ただし、ほんとうにあなたがたがキリストに聞き、キリストにあつて教えられているのならばです。まさしく真理はイエスにあるのですから。²² その教えとは、あなたがたの以前の生活について言うならば、人を欺く情欲によって滅びて行く古い人を脱ぎ捨てるべきこと、²³ またあなたがたが心の霊において新しくされ、²⁴ 真理に基づく義と聖をもって神にかたどり造り出された、新しい人を身に着るべきことでした。』

今度は**コロサイ 3:5~11**。『⁵ですから、地上のからだの諸部分、すなわち、不品行、汚れ、情欲、悪い欲、そしてむさぼりを殺してしまいなさい。このむさぼりが、そのまま偶像礼拝なのです。（“むさぼり”という言葉を知ると、妻以外の女性を求めるとか、夫以外の男を求めるとか、今ある生活では満足せずに「もっと欲しい。あれも欲しい。これも欲しい。もっと金を欲しい。もっと欲しいものを欲しい。」と飽くなき欲望をイメージすると思いますけれども、この“むさぼり”は必ずしもそのようないわゆる否定的な退廃的なものばかりを指すのではなく、この“むさぼり”はまさに自分を高めることも含まれています。自己崇拜も立派な偶像礼拝です。自分を優先し、自分を大事にし、自己尊重、自尊心、セルフ・エスティーム、これもむさぼりの罪です。自分にこだわって、そして自分を捨てられないわけです。自分を礼拝するという偶像礼拝でもあります。神を愛するのではなくて自分を愛するわけです。)⁶ このようなことのために、

神の怒りが下るのです。⁷あなたがたも、以前、そのようなものの中に生きていたときは、そのような歩み方をしていました。⁸しかし今は、あなたがたも、すべてこれらのこと、すなわち、怒り、憤り、悪意、そしり、あなたがたの口から出る恥ずべきことばを、捨ててしまいなさい。⁹互いに偽りを言うてはいけません。あなたがたは、古い人をその行いと一っしょに脱ぎ捨てて、¹⁰新しい人を着たのです。新しい人は、造り主のかたちに似せられてますます新しくされ、真の知識に至るのです。¹¹そこには、ギリシヤ人とユダヤ人、割礼の有無、未開人、スクテヤ人、奴隷と自由人というような区別はありません。キリストがすべてであり、すべてのうちにおられるのです。』これが新しく造られたクリスチャンの姿です。これが教会の姿です。

第二コリント 5:17 にも『だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。』もう古い自分にこだわる必要ないのです。古い自分、古い性質、肉の自分のセルフ・エスティーム。愚かしい話です。古い自分をいじくってより良いものにしようと心理学や精神分析学は努力するわけです。でもやはりそれは完全にすることは出来ない。いつか機能しなくなってしまうのです。中古車をいじくって何とか乗れるように、何とか動くように。でもいつか限界が来るわけです。そのまま乗り続けるためには、完全にエンジンをオーバーホールしなければ、新しいエンジンを入れなければ、もう動かなくなる日がやって来るわけです。この世の哲学、幼稚な教えと言われる心理学や神を抜きにした学問は、何としてでもその古いエンジンを騙し騙し直しながら、少しでも乗り続けることが出来るように、少しでも快適にするように。それが自己尊重、セルフ・エスティーム、自尊感情を高めるという、また自己肯定と呼ばれる自己啓発、自己実現の類の教えであります。古い自分をいじくってセルフ・イメージを向上させて自尊感情を高める。セルフ・エスティームに躍起になる。そういうところから私たちクリスチャンは救われてきたということを知って下さい。

オズワルド・チェンバーズという人がこう言っています。「神から来る救いとは、自分自身から完全に救い出されるという意味である。」つまり、キリスト教の救いとは、自分自身から完全に救われるという意味であると。ですからもう自分はどうでもいいわけです。イエスが言われる通り「自分を捨てなさい。」自分の考え、自分の哲学、自分の手法、自分のこだわり、それらのものに私たちは執着して、その中でもがいてきたわけですが、結局救われなかったわけです。結局行き詰まったわけです。結局ポンコツになってしまったわけです。そこから救われるわけです。『だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。』折角新しいエンジンが与えられるのにまだ古いエンジンにこだわって、まだこれを使おうとしているわけです。もうそんなものは捨てればいいのです。まだ古いものをいじくって、こだわって使おうとしているので、前と変わらないような状況になってしまうのです。折角クリスチャンになったのに、未だに抜け出せない、未だに抜け切れない、未だに引きずっている、未だにこだわっている、未だに変えられないでいる、未だに忘れられないでいる、未だにやめられない、それらです。潔く捨てなさい。セルフ・イメージなんて捨てなさい。キリスト・イメージがすべてである。自分のイメージには限界があるわけです。でもキリスト・イメージには限界がありません。あなたはいくらでも開発されます。自己啓発には、自己開発には、能力開発には、この世での成功には、限界があるのです。でもキリスト・イエスにあっては全く限界がないということです。いくらでもあなたは変わるのです。出来なかったことが出来るようになるのです。素晴らしい救いです。ですから、「神から来る救いとは、自分自身から完全に救い出されるという意味である。」というその意味を是非知って頂きたいと思います。

28 節。『ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。なぜなら、あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって、一つだからです。』先ほどもコロサイ 3 章のところでも同じような言葉を見ました。同じ人が書いているわけですから、当然同じ内容となっても不思議ではありません。パウロは同じようなことをガラテヤ人への手紙にも、コロサイ人への手紙にも繰り返しているわけです。強調しているわけです。ちょうどこのガラテヤ人への手紙の背後には、ユダヤ主義者たちが「割礼を受けなければ救われぬ。」一旦ユダヤ人にならなければ真のクリスチャンにはなれないというような非聖書的な異端的な教えをして、ガラテヤの諸教会の中をかき乱していたわけです。彼らは偽兄弟とも呼ばれていました。実際にユダヤ教徒の男性は毎朝こう祈ったそうです。「神よ、私が異邦人でも

奴隷でも女でもないことを感謝します。」異邦人でないことにおいて神をほめたたえます。また奴隷でもないことを感謝します。女に生まれなかったことを感謝しますと、当時のユダヤ人男性はそのように祈ったようです。ユダヤ主義者と呼ばれる人たちは、割礼派と呼ばれる人たちは、律法主義者と呼ばれる人たちは、自分たちと他者を区別しようとしたわけです。ユダヤ人と異邦人の間に壁をつくったわけです。差別を設けたわけです。これが常に律法主義のもと弊害です。「あの人たちと私とは違う。私たちは彼らよりも上である。彼らよりも優れている。彼らはできていない。なっていない。駄目クリスチャンだ。」と、そのようなレッテルを貼って断罪するのが、ユダヤ主義者、割礼派、律法主義者、行為義認の人たちであります。教会の中にはそのような差別を設けてはならないとパウロは言っています。そのような身分の差とか、性別の差、民族の差。日本人でもアメリカ人でも韓国人でも朝鮮人でもキリスト・イエスにあるならば、そこに壁を設けてはいけません。皆キリスト・イエスにあって兄弟姉妹、神の家族である言っているわけです。キリスト・イエスにあっては皆区別なしに 1 つである。岩波文庫から出ている岩波訳聖書ではここをこう訳しています。『キリスト・イエスにおいて 1 人なのだからである。』と。教会は“キリストのからだ”と呼ばれています。ですから『キリスト・イエスにおいて 1 人なのだからである。』と、なかなか良い訳だと思えます。ユダヤ人だとか異邦人だとかいろんな人たちがいるのではない。私たちはひとりの人なんだ。だから違いなど設けてはいけません。男の方が上、女の方が下だとか。社長が上、社員が下。そんな事はないんだ。全員クリスチャンならば、社会的地位であろうとなかろうと、どの民族であろうと、どの国民であろうと、どんな国籍を持っていようと、全員が全員神の子どもではないか。キリスト・イエスに対する信仰によってあなたがたは神の子どもと、先ほど読んだばかりです。神の子どもの中にそのような差異はないということです。差別はないということです。強いて言うならば、男もキリストの花嫁と呼ばれているわけです。その一方で律法は、隔ての壁を設けます。律法を守る者と守らない者。ルールを守る者と守らない者。線引きをするわけです。そして敵意をそこに感じるわけです。でもそのような両者を隔ててしまう敵意の壁を、イエス・キリストが打ち破られた、打ち砕かれたということが**エペソ 2 章**にも書いてあります。後で読んでみて下さい。キリストこそが私たちの平和であって、この両者の壁、ユダヤ人と異邦人の壁、律法を持つ者と持たない者の壁を全部打ち壊したんだ。そして皆がキリストにあって 1 つである、同じ聖徒である、同じ神の国民であると。それが教会ということです。ですから教会には国境はありません。教会には本来は人種差別などないのです。黒人、白人、そんな違いはないのです。黒人の教会、白人の教会、おかしな話です。有色人種の教会、アジア人の教会、そんなものはないのです。ユダヤ人の教会、異邦人の教会、そんなものはないのです。強いて言えば元ユダヤ人の教会、元異邦人の教会、元日本人の教会、元韓国人の教会、本アメリカ人の教会、と言えてでしょう。キリスト・イエスにあっては 1 人の人なんです。新しく造られた者なのです。古いものにぶら下がってはいけません。私たちのアイデンティティ、ID というものはキリストなのです。私たちは皆“キリスト者”と、“クリスチャン”と呼ばれる者です。キリストに属しているのです。国籍は天にあるのです。ですから日本人である前にクリスチャンなのです。日本国民である前に私たちは天国民なのです。これを忘れては、私たちはいつまでも古い考えに引き戻されてしまいます。日本人だからこうなんだとか。日本人だからこういう考えなんだとか。アメリカ人だから、韓国人だから、朝鮮人だから、中国人だからとか、白人だから、黒人だから、ユダヤ人だから、異邦人だから。そういうつまらない考えにいつまでも私たちは振り回されてしまいます。そして間違いを犯すわけです。そして結局は古いままの自分でつまづいてしまうわけです。すべての人は神の前には罪人であります。共通点は罪人であるということです。人を見下してはいけません。三国民だとか、見下す人がおります。私たちは三国民ではなくて、神の国民であることを忘れてはいけません。でもそうなる前には、イエス・キリストを知る前には私たちは地獄の国民だったのです。忘れてはいけません。国籍はどうであれ、民族はどうであれ、肌の色はどうであれ、誰もが神の前には罪人で、私たちが属すべきだったのは地獄という国だったのです、ゲヘナだったのです。日本だとか、朝鮮だとか、アメリカだとか、神の前にはそんな違いなどないのです。全員が全員罪人なのです。頭のとっぺんから足のつま先まで、もう中身も全部正真正銘の完全なる罪人、それが私たちだったわけです。でもそんな私たちが神の恵みによって救われたのです。素晴らしい出来事です。これこそが素晴らしい、喜ばしい良い知らせです。福音です。その福音を台無しにするようなことをしてはならないと、

パウロは言っているわけです。「ああ愚かなガラテヤ人、ああ愚かな信州人、ああ愚かな日本人。」と、愚かな考えに至ってははいけません。愚か者になってはなりません。そこに違いがあるなどと思ってはならないと言っているわけです。自分のアイデンティティーにこだわってはいけません。むしろキリストというアイデンティティー、これにこだわるべきであるということです。クリスチャンであることにこだわるべきであると。ユダヤ人も異邦人も皆罪人で、皆神の恵みが必要です。全員が全員罪人ですから、イエス・キリストの救いが必要なのです。自由人も奴隷も男子も女子も皆同じです。

そして最後にガラテヤ 3 章 29 節。『もしあなたがたがキリストのものであれば、それによってアブラハムの子孫であり、約束による相続人なのです。』素晴らしいですね。私たちはもう養育係が要りませんので、キリストにある成人として立派な約束による相続人としての立場、特権、権威を与えられています。キリスト・イエスにあってもう私たちは律法を不要とするものです。もし私たちがイエス・キリストのうちにあるのならば、私たちはキリストのもので、モーセのものではありません。律法のものではないのです。行いのものではないのです。私たちはアブラハムのもの、アブラハムの信仰に倣う子ども、信仰の父の子どもです。約束の者なのです。行いの者ではなくて、約束を信じる者です。強いて言うならば、そこにだけは区別を設けて下さい。ユダヤ人・異邦人、自由人・奴隷、男子・女子、そのようなつまらないくだらない区別をするのではなくて、むしろ信仰義認か行為義認かの区別。約束か律法かの区別。その区別はしっかりと線引きをして、前の自分に戻らないように、古い自分に戻らないように、古い生き方に戻らないように、古い考えに戻らないように、愚かなガラテヤ人に戻らないように。それがパウロの言わんとしていることであります。では今日はこれで 29 節まで見ましたので、次回 4 章に入って行きたいと思えます。